



新たな年をどのようにお迎えでしょうか。期待と不安が入り交じった年明けになりました。生涯学習課としても、可能な限り様々な郷土の歴史・文化についての発信をしていこうと思います。今年もよろしくお願い申し上げます。

瞳がキラキラ

13日(木)に越谷市立千間台小学校3年生が旧東方村中村家住宅に社会科見学で訪れました。児童数が多いので午前と午後にそれぞれ3グループに分かれての来館でした。新型ウィルス感染に万全の注意を払いながら、主屋の見学、天秤棒体験、昔の明かり体験を行いました。実物を観る子どもたちの瞳はとても輝いていました。その一端をご紹介します。

出入口が4つもある家

主屋の出入口は4つもあることを知って驚いた児童に現代住宅との相違を見てもらうために、土間を中心に案内しました。高く太い敷居、土間の役割の説明の後、茅葺屋根が雨漏りしないことを左の写真のように茅束を使った実験で確かめました。(当館は元来は茅葺でしたが、防火のために金属板の屋根にしています。)



次に土間の上に視線を向けると、そこにある太くて曲がった梁の木組みにも驚いていました。「適材適所」という言葉があるように、古来木材の用い方には自然の理にかなった匠の技があります。児童の驚きは、後にこういうことに繋がっていくかもしれません。



カウでも重いっ!

電気、鉄道、自動車などがなかった時代、一人で物を運ぶ道具の中に天秤棒がありました。今回は下肥を入れた桶(直径約40cm:、深さ約40cm)と稲苗を運んだ籠を用意しました。いずれも空の容器ですが、特に桶の場合は小学3年生にとっては重くて、バランスもとりにくかったようです。天秤棒を使っていた時代の苦労だけでなく、この道具の中にも工夫があったことを感じてもらえたらと思います。



それにしてもこの桶に七分目まで水が入っていたとして、二つでは大人一人分の重さになります。それを天秤棒で運ぶのは並大抵ではなかったでしょう。下肥ならもっと大変です。

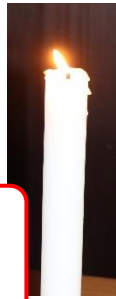
紙に困まれて、どうして明るくなるの?

最も古い人類は、今のところ約700万年前の猿人だそうです。今から50万年前の原人の時代に、ようやく火を使うようになったようです。それから現在までの大部分、照明具として火を用いてきました。そんな気

の遠くなるようなことを思いながら昔の明かり体験の計画を立てました。用いた照明具は次の通りです。



灯明



洋蠟燭



和蠟燭



行灯



石油ランプ: 当時の家庭用ランプは使えないので、キャンプ用で行いました。



白熱電灯

この体験の中で灯明を行灯に入れた時のことでした。子どもたちの中から「わあ、明るくなった」という声がありました。そして「紙に囲まれているのに、どうして明るくなるの?」という疑問の発言がありました。

それは使われているのが和紙だからです。和紙は楮やミツマタの樹皮から作られますが、漉いた時に樹皮の繊維が縦横に入り込むので、光を乱反射させて明かりが柔らかく広がります。こういうところにも児童の探求心は及んでいきました。

こうして照明具が白熱電灯になった時、わずか40ワットの明かりでも「まぶしい!」と感じたようです。市域に電気が通ったのは早い地域では大正2年(1913年)、遅い地域ではその隣村で昭和元年(1926年)でした。実に13年の時差があったのです。現代ではこのようなことはありません。電気機器普及の時差は、当時の市域の人々の生活や気持ちにどのような影響を与えたのでしょうか。

火が見られなくなった現代

古民家で生活が営まれていた頃、家の中には何か所も火がありました。照明だけでなく炊事、風呂、暖房などの他に、神棚や仏壇に。そして屋外でも焚火や野焼き、時には虫追い、祭りの篝火等、地域行事でも用いられました。

“昔の明かり”から次のことに思いが至ります。

- ◆人類が火を様々な利用してきたことの一つに照明があり、その期間がとても長かったこと。
- ◆火の照明具の燃料や材料は、日本では植物由来のものが多かったこと。例えば油は菜種油(魚油もありました)。灯心はイグサの芯。蠟燭の蠟は蠟燭や漆の実(ヨーロッパでは動物の油脂)。行灯の枠は木材で和紙は楮などの樹皮。
- ◆屋内でも火を使うことが多かった時代は火事も多く、特に町では大火になりやすかったこと。
- ◆電気の普及で便利に快適になったこと。けれども災害時には電気のないことが命に係わることもあること。
- ◆電気普及には狭い地域の中でも時間差があったこと。そのことによる影響。
- ◆現代では火を見ない生活が多くなり、火への思い(畏れ(かしこまる気持ち)、恐怖、安堵感、高揚感など)が薄くなってきたこと。

このように「昔の明かり体験」はいくつもの視点で考えることができます。学童だけでなく大人も、歴史や今の生活を改めて見直すきっかけになるかもしれません。先日、阪神・淡路大震災の慰霊が現地で行われましたが、その時に竹筒に蠟燭が灯されていました。火、炎は人の精神性とも関連があることを思い出させてくれました。

小学3年生が壮年になり人生の折り返しにかかる頃、火は人々の生活の中でどのように用いられ、また意識されているのでしょうか。

